三木北 Library

令和３年7月9日(金)
三木北高校図書室

コロナ禍の時代、夏をどう過ごす？

コロナ禍でむかえる２年目の夏。ワクチン接種は進んでいますが、以前の生活に戻れる日は、まだ少し先になりそうです。いろいろな工夫をしながら、少しでも楽しい夏を過ごしたいですね。夏休みにむけて、新刊がたくさん入ったので紹介します。

『スマホ脳』アンデシュ・ハンセン 著（新潮新書）



最近あなたはしっかりと睡眠がとれていますか？人間にとって大切なものは、睡眠、運動、そして人との関わりです。しかしここ１０年で、デジタル化は進み、生活は豊かで便利になる一方、人々の脳は蝕まれているのです。無駄な時間とわかっていても、スマホを手放すことはできない。スティーブン・ジョブズが我が子になぜ ipad を触らせなかったのか？

これからのスマホとの付き合いかたを考える一冊です。

『青天を衝け』大森 美香 著（東京ニュース通信社）



渋沢栄一って聞いたことありますか？若手人気俳優の吉沢亮さんが今年の NHK の大河ドラマ「青天を衝け」で演じています。

今から 170 年ほど前、江戸末期に農家の長男として生まれた青年が、やがて経済大国、日本の巨大な星として輝く、サクセスストーリーです。そこには大きく変化していく時代とその時代のキーマンとなる人たちとの運命的な出会いがありました。

コロナで時代が大きく変わる今、栄一の生き方に触れてみるのも面白いです。

『この気持ちもいつか忘れる』

住野 よる 著（新潮社）



退屈な日常に絶望する高校生のカヤ。16 歳の誕生日を迎えた直後、深夜のバスで出会ったのは、異世界の少女だった。真夜中に邂逅を重ねるうち、互いの世界に不思議なシンクロがあることに気づき、二人は実験を始める。

大ベストセラー『君の膵臓をたべたい』の著者住野よるさんが描く、初の恋愛長編!

『麦本三歩の好きなもの』

住野 よる 著（幻冬舎文庫）



寝坊すること。本を読むこと。食べること。嫌なことがあっても大好きなチーズ蒸しパンを食べればいつも気分は上々。お気に入りの音楽を聴きながら一人時間を満喫。好きなモノがたくさんあるから、毎日はきっと楽しい！

図書館勤務の 20 代女子、麦本三歩のなにげない日常を描いた、こころがほっこりする小説。

『もっとよのなかルールブック』

高濱 正伸 著（日本図書センター）



●成長は「だれか」とではなく「昨日の自分」とくらべること。
●「力を貸してあげたいな」と思ってもらえる人になる。

人にはずるい部分やダメな部分が必ずあるけど、逆に美しい部分やたくましい部分があって、そのすべてを認めて生きていくしかない。厳しい時代を生きていく君に、伝えたいことがたくさんある。

『ブロードキャスト』　湊 かなえ著（角川文庫）



　夏の全国高校野球大会、甲子園でアナウンスを担当するのは、N コンのアナウンス部門で優勝した放送部員だと知っていましたか?
　所詮文化部！ではない。文化部に情熱を燃やす高校生の熱い戦いを描いた青春小説。
　事故で陸上をあきらめた圭祐が、次第に放送の魅力に引き込まれていき、やがて NHK 杯全国高校放送コンテスト（N コン）を目指す。

『ドキュメント』　湊 かなえ著（KADOKAWA）



　「ブロードキャスト」の続編。
　圭祐は、テレビドキュメント部門の題材として、自分があきらめざるを得なかった陸上部の活動を取り上げた。
　人と人。対面でのコミュニケーションがむずかしくなったコロナ禍の今だからこそ「”伝える”って何だ?」ということを追求した、興奮と感動の高校部活小説。

『ブラック・ショーマンと名もなき町の殺人』

東野 圭吾 著（光文社）



　ほとんどの人が訪れたこともない、名もなき町。その町に再び客を呼ぶための計画が進行中だったが、コロナウイルスの蔓延により頓挫。追い打ちをかけるように殺人事件が起きる。そこにとんでもないヒーローがあらわれた！
　本の帯にはこんなふうに書かれています。
犯人と探偵役、それぞれの仕掛けが張り巡らされています。騙されないように、お読みください。

『なもなき世界のエンドロール』

行成 薫 著（集英社文庫）



幼なじみの俺とマコト。「ドッキリスト」のマコトが、「ビビリスト」の俺を巻き込んで、一世一代の「プロポーズ大作戦」を決行する。

一日あれば世界は変わる。男たちの命がけの情熱は、彼女に届くのか?

大いなる「企み」を秘めた、第 25 回小説すばる新人賞受賞作。

『世にも奇妙な君物語』

朝井 リョウ 著（講談社文庫）



異様な世界観。複数の伏線。先の読めない展開。想像を超えた結末と、それに続く恐怖。もしこれらが好きなら、これはあなたのための物語です。待ち受ける「意外な真相」に、心の準備をお願いします。

２５周年を迎えたテレビドラマ「世にも奇妙な物語」の大ファンである、直木賞作家の朝井リョウ。映像化を夢見て、「世にも奇妙な物語」のために勝手に原作を書き下ろした短編集。

『さざなみのよる』　木皿 泉 著（河出文庫）



43 歳の若さでこの世を去ったナスミ。彼女の言葉や存在は、家族や友人、そして彼女を知らない次世代の子どもたちにも広がっていく。

人は必ず死ぬ。でも、誰もが生きた過程の中で出会った人たちに何かを残している。見えるモノが全てではない。コロナ禍の時代だからこそ大切にしてほしいものを教えてくれる、感動の一冊です。